

生活記録ノートを活用した 家庭学習の習慣化に関する指導の工夫

【春日部市教育委員会】

1 学校、学年、教科

中学校、全学年、全教科・領域

2 ねらい

家庭学習の習慣化と共に、その学習の質の向上を図る。

3 取組内容

(1) これまでの取組と本年度の取組

本校では、昨年度より「学力向上を目指し、豊かな心を育む生徒の育成—生徒自ら学ぶ力をつける教師の授業力を磨く—」を研究主題として取組を行ってきた。

昨年度は、以下のように、自主学習ノートと一体化させた「生活ノート」の在り方をまとめ、教員間で確認し、生活ノートの活用を全校で始めた。

①家庭学習の習慣化を図ることを主目的とする。 ②「誰でも、無理なく、継続して」行えることを基本とする。

③個に応じた指導を念頭に指導と評価をする。 ④内容についての制限はなく、どの教科を学習してもよい。

⑤学習したプリントを貼り付けてもよい。 ⑥塾等での学習とは切り離して考え、家庭学習の習慣化へと立ち帰る。

本年度は、家庭学習の習慣化を図ることを主目的としていることには、これまでと変わりはないが、家庭学習の質の向上や個に応じた段階的な指導などを新たな視点として取り入れ、取り組んでいる。特に質の向上を目指し、生徒の詳細な実態調査を行い、分析と考察を繰り返し、「学力向上に繋がる生徒像」を見いだすことを試みた。

(2) アンケート調査

①目的

生徒の生活実態と学習意識に関するアンケートを基に、学力の向上が見られる生徒と見られない生徒の相違点を探り、より効果的な学習指導法を見だし、家庭学習の定着に繋げる。また、その結果を生徒や保護者に開示することで、学校と家庭の連携と家庭の教育力を向上させる。

②アンケートの内容

アンケートは、5つの内容で40問から構成され、全校生徒を対象としている。

(例) 生活規律…ゲームや携帯電話、PCを使ってよい時間を決めていますか。

生活意識…頑張れば、いつか実現すると思いますか。

生活態度…多少いやなことがあっても我慢するようにしていますか。

学習意識…点数や成績が伸びることがおもしろいですか。

学習環境…帰宅したときに家に人はいますか。

③アンケート結果

(i) 中学生になって苦手になった教科とそのきっかけ

2・3年生の結果では、数学と英語に苦手意識を持つ生徒が多いことがわかった。英語では全体の約4割、数学では女子の約3割が苦手意識を感じていることがわかった。

(ii) 苦手になった教科を克服できた生徒とできなかった生徒の相違点

この苦手を克服できたと回答した生徒は、全体の12%いた。その生徒の特徴は、学習への取組方に表れた。克服できた生徒の1日あたりの「自主的な勉強の時間」が平均52分であるのに対して、克服できなかった生徒は平均38分であった。(図1) また、1日あたりの「家庭学習の時間」では平均時間に差はないが、“2時間以上”の学習をする生徒の割合が16ポイントの差をつけて克服できた生徒に多かった。(図2)

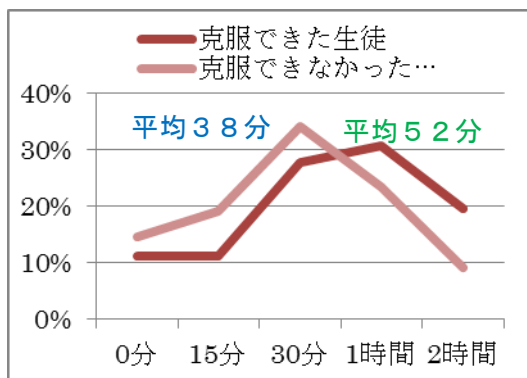


図1 自主的な学習の時間

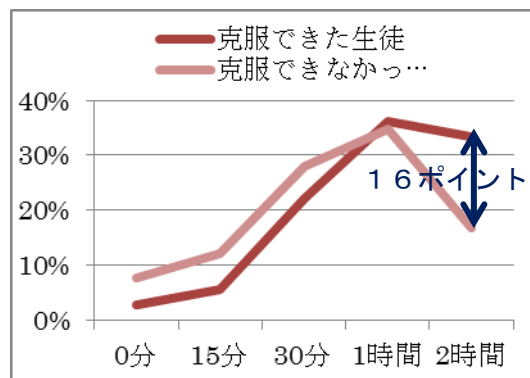


図2 家庭学習の時間

4 成果と課題

(1) アンケート結果の生徒への還元

①学級活動を活用した“学習への向き合い方”の指導

これらの結果を生徒の学習活動へ活かすために、全校で『ノートの活用方法について考える』学級活動を実施し、データを基にした学習の現状とその克服へ向けた取組を生徒一人一人が考える時間を設けた。(写真1)

表1のように自校の「克服できた生徒」と「克服できなかった生徒」の違いを提示した上で、自分のできている部分と足りない部分などを考えさせた。すなわち、自分の家庭学習に必要な姿を焦点化する学級活動を行った。その結果「今まではノートをきれいに書くことばかりに気が向いていたが、苦手を克服するためには一つ一つ理解しながら目的を持って学習する必要がある」というような、各々の現状に即した学習態度を表明することができた。(写真2)



写真1 ノートの活用方法について考える学級活動

表1 自校の苦手教科を克服できた生徒とできなかった生徒の相違点

	克服できた人	克服できなかった人
自主学習ノートをかなり活用していると感じている人	28%	18%
家庭での1日あたりの学習時間(塾や習い事以外で)	平均69分	平均62分
家庭での1日あたりの学習時間が「2時間以上」の人	33%	17%
家庭学習のうち、宿題以外の自主的な勉強の時間	平均52分	平均38分
宿題以外の自主的な勉強の時間が「1時間以上」の人	50%	32%
自主学習に目的や目標を持っている人	89%	70%
問題をあまり解かない人	3%	24%
教科書の重要な部分や問題の解き方をあまり暗記しない人	17%	37%
問題を解いた時は、必ず自分で答え合わせをするようにしている人	47%	36%
間違えた問題はどこが間違えているのかを確認して解き直す人	44%	23%
分からない問題があっても、そのままにする人	20%	58%
好きな教科以外の勉強をすすんでする人	33%	23%
授業でわからないことがあっても、そのまますることが多い人	6%	21%
テストの点数など次の目標を設定して勉強している人	61%	26%

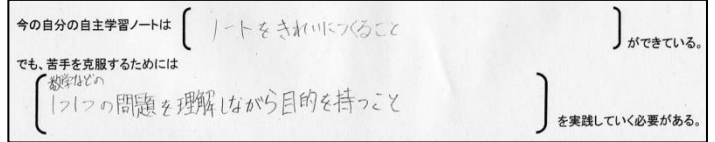


写真2 苦手を克服するために必要な自己課題の明確化

②家庭学習での“ノートのつくり方”の指導

また、「ノートの活用術」を記したリーフレットを発達段階に応じて学年毎に作成し配布した。内容は国語、社会、数学、理科、英語、その他の教科から成り、学習に目的を持たせ全体的な質を向上させることを主目的としている。(図3) それらの取組の結果、担任が学習の質について6段階で評価する調査において、7月に比べて10月の調査で平均6%の増加が見られた。つまり、家庭学習の質が全体として向上したと考えられる。(図4)

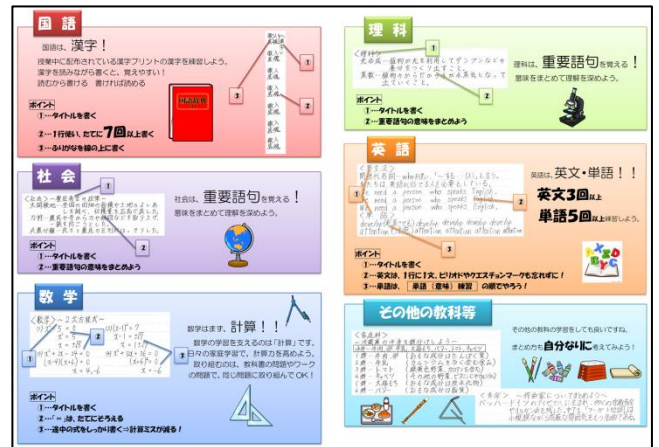


図3 ノートの活用術を記したリーフレット(3年生用)

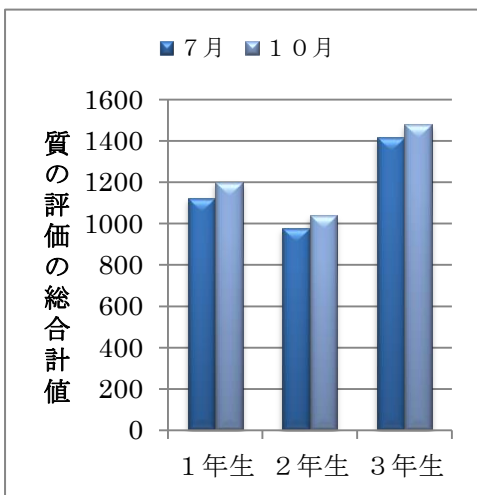


図4 家庭学習の客観評価の変化

(2) アンケート結果の保護者への提示

また今後は、保護者に対しても生徒と同様に、規律や意識、態度と学力との関連性を具体的に示し、生徒・保護者・学校が類同な思いを共有できるようにし教育効果を高める。

(3) まとめ

家庭学習の充実への取組は、生徒の学力を向上させる手段として有効である。なぜなら、苦手を克服できた生徒は家庭学習を活用し自ら課題を見だし、目的を持って学習に取り組んでいるからである。また、それらを手本として全校的に指導することによって、学習の質の向上が見られることから、今後も「生徒が自ら学ぶ力をつける」支援を続け、生徒の学力向上へ繋げていきたい。